た、近代における交通の急速な発達は、かつての街道沿いの聚落から離れた所を通過するバイパスを次々に設けることになり、各地の主要道路は旧街道の道筋とは異った所を走ることとなった。そのため、旧街道の一部には全く廃道となってしまった所もある。そのようなことのために、『標註』の記載内容が不明になっている所もある。現地踏査によって、それらの遷り変りの跡を考え、六百年前の地理的状況の復元を計り『廻国雑記』の旅の経路とか、記載地の所在とかが、現在のいずれの地であるかを明らかにする努力を重ねた。しかしながら、依然として不明の所は多く、今後の研究調査に待つべきものがあり、諸賢のご教示を願うものである。

この一書を上梓するに当り、若き日から長い歳月、ご指導とご愛顧を忝くした故人見圓吉先生、文学研究の上で、その基盤である風土に深く思いをいたすべきことをお教えいただき、格別のご好誼を賜った故久松潜一博士、ならびに昨年、急逝された文学風土論の師である長谷章久博士の学恩に対し深甚の謝意を捧げるものである。また、この『廻国雑記』研究に関して、つねに励しとご助言をいただいた竹下数馬立正大学教授、そして、聖護院関係の資料調査に格別のご配慮を下さった聖護院執事長宮城泰年氏を始め、ご援助を賜った各位に対して、特に現地踏査及び資料整理などに、労を惜しまれず協力して下さった方々に心から感謝の意を表するものである。さらに、この研究をまとめるについて、その力となり、出版の労をとって下さった武蔵野書院の長尾宏氏のご好意を謝するとともに、本書の印刷が三〇年来の知己、大文堂印刷の梶原邦夫氏の手になったことを、この上ない喜びとするものである。

昭和六十一年十一月二十七日

太子堂の寓居にて識す。

目次

まえがき……1

〈研究篇〉

一、『廻国雑記』とその旅……9

二、『廻国雑記』の作者と諸本……18

三、『廻国雑記』の文芸的意義――その俳諧性――……29

四、『廻国雑記』の地理的研究……45

㈠白山禅定の道　㈡上野の旅　㈢相模路　㈣十玉坊

〈新註篇〉

旅立・若狭へ……109

北陸回国行脚……114

東国・上野から安房へ……123

鎌倉から日光山・筑波山へ……133

下総稲穂から鎌倉へ……143

研究篇

相模・駿河の旅……155
大塚十玉坊滞在……163
武蔵野越年……176
甲州路から奥州へ……184
みちのくの旅……191

一、『廻国雑記』とその旅

『廻国雑記』は文明十八年（一四八六）六月から翌十九年五月にかけての約一年間にわたり、聖護院門跡、道興准后によって行われた、北陸・東国・みちのくを巡る回国修行の旅における紀行文である。道興が、当時、洛北、岩倉の長谷（ながたに）にあった聖護院を後にして、長途の回国巡礼に旅立ったのは文明十八年六月十六日の早暁のことである。時に道興は五六歳であった。旅の門出に当り、大原野の神明の社（寂光院の奥に隣接して鎮座）に法楽して、その前途を祈願した一行は、大原越えの道を辿り、花折峠を越え、朽木の里を経て若狭国、小浜へ向った。小浜では禅宗の曹源院に宿り、武田氏の接待を受けた。その後、若狭から、越前・加賀・能登・越中・越後の諸国を巡り、炎暑の北陸路に旅を続け、一ヵ月後の七月十五日、越後の国府に到着し、上杉氏の下に身を寄せて、そのねぎらいを受けた。越後に至る間に、白山・石動山・立山に登拝し、その禅定を果している。しばらく国府の長松寺塔頭、貞操軒に滞在し、旅の疲れを癒した後、越後路の海沿いの街道を直江津に到った。そこから南下し内陸の山路を辿って三国峠を越え、始めて東国に足跡を印した。上野の国では、大蔵坊・杉本坊にそれぞれ十日余り逗留し、近傍の名所を訪れ、上野からは武蔵・下総・常陸・上総・安房を過ぎ、それらの国々の社寺・院坊を尋ねている。房総から舟路で三浦三崎に渡り、鎌倉入りをしたのは九月上旬のことである。そこから、いかなるわけか、休む暇もなく、関東平野を北上して日光山に詣でている。日光では坐禅院にしばらく滞在し、中禅寺にも登拝している。日光に中秋名月を賞した後、再び常陸に赴き、筑波山を登拝した。下総を経て鎌倉に帰り着いた道興は、始めて建長・円覚などの五山を始めとする鎌倉の諸寺を巡拝している。その後、鎌倉から相模路を伊豆に至り、箱根権現・三島明神・富士の御山に詣でた。東海道は三保の入海まで足を伸ばし、帰路には相州の大山寺を登拝している。相模か